

## 倉橋惣三との対話 ⑨

## 子どもの「夢中」をいかに見取るか

浜口順子

(大学教員)

子どもが「夢中」になるとき

子どもが無心に遊ぶ姿を、大人は昔から「戯れせんとや生まれけん」とほほ笑ましく見守り、いかにも子どもらしいものとして捉えてきました。最近の幼児教育学の世界では、幼児が「安心感 (well-being)」をもって生活し、遊びや活動に「集中・没頭 (involvement)」でまわっているか、保育の質が評価できるという理論がよく知られています。つまり、幼児がじっくり遊び始めるには、まずその子どもの存在自体が受け入れられ、安心して過ごす環境が必要です。そうして、周囲の世界 (モノや人) へ働きかける能動性が生じ、触ったり、話しかけたり、移動したりしているうちに、知らず知らず何かに集中して取り組んでいる状態になります。「集中・没頭する」を意味する *involve* という動詞には、「いつの間にか巻き込まれている」という意味が含まれています。意識的に自分をそのような状態に入れるのではないという点が、幼児教育において特に重要なのだと思います。

保育において求められる子どもの「夢中」という状態は、むろん文字通りの「夢の中」ではな

く覚醒状態の中で起こります。一心に遊んでいる子どもは現実的です。私が幼稚園の観察を始めた頃、砂場で幼児が「どうぞ」と砂団子を私に差し出してきたので、幼児のイメージションの世界を壊してはいけないと戸惑いながら、「いただきます」と言っただけで口元すれすれまで団子を持つていきました。すると「だめだよ、ほんとお団子じゃないから」と、その子は当たり前のように言っただけでまたお団子を作り始めました。幼児は夢中に遊んでいても、夢と現実の間を自由に行き来していると実感したのですが、別の表現をすれば、イメージションと現実を別のものとする考え方が大人側の固定的な思考法なのであって、人が現実認識を形成する過程では想像力が不可欠であるということになります。

### 倉橋惣三の「本真剣」

倉橋先生も子どもが夢中になって遊ぶ姿がもつとも大事であると言われていますね。「本真剣」という言葉がそれに当たるのだと思います。

我が子供に向って希望することのうち、何よりも一番大切としている事は、物事本真剣な子供、本真剣になれる子供になってもらいたいということである。(略) 本真剣ということは、……全心力を挙げて一定時内ただひとつのことに集注しているということになる。これを裏からいえば、浮心でないことである。ふた心でないことである。(略) 物事を浅く上滑りしか出来ない子供を、我等はもっとも憂い悲しむのである。(略) とところで、一時一事というのは、一時に甲を思い乙を思わぬということである。ところが思っている事柄は、甲だけであっても、真の集注、真の本真剣といえない

ことがある。これは他でもない。甲を思っている我をさらに他の我が思っている時である。この場合、我は二つに分れる。たとえば花を見る我と、さらにその風流な我を見ている我とになっている。(略)むしろ一層甚しい不集注であり、また不真剣である。

〔倉橋惣三選集第二巻〕フレーベル館 1965年所収『幼稚園雑草』から pp.212 - 213)

真剣の上に「本」がついて「本真剣」。今はあまり聞かない言葉です。おそらく、倉橋先生も「大人の世界で普通に言うような真剣ではありませんよ。子どもの真剣は、子どもの本性。大人のそれとは程度も質も、そして意味も違うのです」と言いたかったのではないのでしょうか。

1937年の『キンダーブック』（倉橋先生が編輯顧問の一人）の「ヨイコドモ」特集（第10輯第1編）の中に、動物園遊びのキリンを、保育室で女兒が箱や紙を使って製作している場面が描かれたページがあり、そこに「本真剣」という題名がついています。ちょうど、キリンの顔に目を書き入れようと意識を集中している仕上げの瞬間です。「サイゴハ カオデス。ハナカイテ、オメメヲ カイタラ イキテキタ。ホンキデ カイタラ イキテキタ。」

子どもが一心に集中して物事に取り組むときに、子ども一人ひとりの世界が生き生きとした生命を發揮するということ。その世界が子どもの中で息吹き始める瞬間瞬間を、そばにいる保育者が見取れるかが、幼児教育を豊かなものにするためのポイントなのではないでしょうか。

### 「夢中」の周辺を見取る

一般的に、子どもの「夢中」や集中度などは、長い時間一つのことをやり続けている、という

ような、外から見えることのみで判断されがちです。しかし、倉橋先生の「本真剣」には、子どもが「ふた心でない」こと、つまり、その子の自我が、自身（「I」と、自分を「me」として客観視する自分とに分かれていないかを厳しく見取る姿勢が要請されています。5歳前後の幼児にとつて、自分が外からどう見えるかを気にするような自己形成の在り方は時期尚早だという考え方に立っているのだと思います。これは、現代においてほとんど注目されていない、児童心理学者倉橋惣三らしい視点であると思います。

子どもの夢を保育で実現するには、夢中につながる環境、つまりそこに至る周辺の状況、また一見、夢中という状態とはかけ離れてはいるが、子どもがリラックスして幸せそうに見える状況を大切に育てることが重要です（図参照）。一人で手持ち無沙汰に見えても外の世界へ触角を伸ばしているか、お友達と一緒にいることを保身でなく真に楽しんでいるか。そのような幸せな状況の先に、ふと「形」「材質」「匂い」「音」「色」などのモノ世界と、子ども（たち）の身体が呼応して夢中の種に出合っていくことが多いのです。大人による外的な指示・評価などによるその子らしくない、いわば「擬制夢中」を、「夢中」だと見過ごしてはいないか、保育者には厳しい省察が求められます。

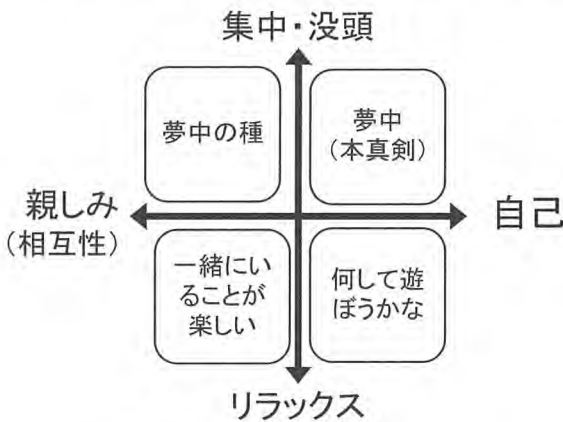


図 「夢中」を見取る保育者の姿勢(2018、浜口)